
宇佐市子どもの生活に関する実態調査

調査結果報告書

宇佐市

平成 31 年 2 月

目次

1. 調査の目的

宇佐市では、今後、全ての子どもたちの将来がその生まれ育った環境によって左右されることがない社会環境を目指し、支援を必要とする子どもやその家庭に必要な施策を行うためには、子どもたちの「今」を調査し、現状を把握する必要があることから小学校 5 年生・中学校 2 年生とその保護者を対象に調査を実施した。今回の調査で得た結果については、庁内関係課で協議を進め、支援を必要とする子どもや家庭に対する方策を検証し、必要な支援について取りまとめる。

2. 調査方法

市内の調査対象の世帯に「調査票」の送付および回答督促を兼ね合わせた「礼状はがき」を郵便により配布を行い、回収は市に直接返送し得たものである。

3. 調査内容

巻末の調査票参照

4. 調査対象者

小学校 5 年生及びその保護者、中学校 2 年生及び保護者

5. 実施日

調査期間 平成 30 年 9 月 30 日～平成 30 年 10 月 31 日
調査票発送日 平成 30 年 9 月 30 日
礼状はがき発送日 平成 30 年 10 月 19 日

6. 調査配布・回収率（数）

種類	配布数	回収数	回収率（%）
小学校 5 年生及び保護者	9 0 4 部	4 7 0	5 1 . 9 %
中学校 2 年生及び保護者	7 8 4 部	4 0 4	5 1 . 5 %
不明(重複・未回答)	—	5	—
合計	1 , 6 8 8 部	8 7 9	5 2 . 0 %

7. 調査実施主体

実施主体 宇佐市 福祉保健部 子育て支援課
調査受託者 株式会社ゼンリン 大分営業所
監修 北九州市立大学 文学部人間関係学科 教授 児玉 弥生

1. 小中学生の回答から

・生活習慣形成上の課題

朝食を食べる、歯みがきをする、決められた時間までに登校する等、子ども達は日々の生活においてこれらの行為を継続することで生活習慣を確立していきます。健康的な生活は子ども達の心身を育み学習に向かう気持ちにもつながります。宇佐市の小中学生の多くは健康的で規律的な生活を過ごしていますが、気になる子ども達もいます。

困窮度 I の小中学生は朝食を「毎日またはほとんど毎日食べる」の割合が低く、また学校に遅刻することあるかの質問に対しては「毎日またはほとんど毎日ある」の割合が他の世帯に比べ高くなっています。歯みがきの習慣でも多くの小中学生が 1 日平均 1 - 2 回歯みがきをしています。困窮度の高い小中学生では「ときどき歯みがきをする」「ほとんど歯みがきしない」の割合が高くなっています。

朝食を「食べない」理由は、小学生では「時間がない」「お腹がすいていない」の順で多く、中学生では「お腹がすいていない」「習慣がない」の順で多くなっています。就寝時間が遅く睡眠不足、夕食後に間食をして空腹感がない、小学生時から食べない習慣が付き空腹を感じなくなっていることが考えられます。虫歯（う歯）の多さは歯みがきを含む歯口のケア習慣と関連しています。困窮度が高いほど歯みがき回数が少なく、習慣が未形成であることが虫歯（う歯）の多さにもつながっています。習慣形成のための保護者の働きかけや就学前段階からの保育所・幼稚園での歯みがき指導が望まれます。

・家族との関係・交流

家族集団は人間にとって基礎的な単位であり、家族同士の関わりの中で人は安心や安らぎを感じ、活力を与えられます。子ども達にとって家庭は人間関係の基礎を学ぶ最初の場であり、保護者や兄弟・姉妹等の他の家族と互いに関わり合いながら自己を形成していきます。宇佐市の小中学生の家族との交流を見ると、朝食を一緒に食べるかの問いに対しては困窮度を問わずどの層も約半数が「ほとんど毎日一緒に食べる」と回答していますが「ほとんどない」の回答も各層全てで 10%を上回っています。共働き世帯が多く勤務形態も様々です。忙しい状況が朝食を一緒に食べるゆとりを失わせているようです。しかしながら、夕食を一緒に食べるかの問いには困窮度による違いが見られ、困窮度が高いほど「週に 2、3 回一緒に食べる」以下の回数の割合が高くなっています。

家族（大人）とのコミュニケーションでは、多くの小中学生が学校での出来事を「ほとんど毎日」「週に 4-5 回」話していますが、社会の出来事については「ほとんどない」「週に 2-3 回」の割合が高く、子どもとの会話では身近な出来事が中心になっています。また困窮度が高いほど、学校での出来事を話す頻度が高くなっています。家族（大人）との外出（散歩・買い物・外食）や文化活動（図書館・博物館・音楽鑑賞）の頻度は、外出は「週に 2-3 回」「週に 1 回」が多いものの、文化活動は「ほとんどない」「まったくない」が多くなっています。家族（大人）との「遊ぶ・体を動かす」頻度は小学生では「ほとんどない」「週に 1 回」が、中学生では「ほとんどない」「まったくない」が多く、子どもと家族（大人）との交流は身近な出来事に関する会話を中心になっていることがわかります。

・子どもの人間関係

平日の放課後の過ごし方は小学生と中学生では異なっています。過ごす場所は小学生では自分の家（40.4%）が最も多く、習いごと（12.8%）、友だちの家（11.8%）と続きます。中学生は自分の家（38.1%）と部活動など含む学校（30.2%）が多くなっています。したがって一緒に過ごす人は、小学生はおうちの大人（29.7%）が多く、学校の友だち（25.6%）、兄弟・姉妹（24.6%）の順です。一方、中学生は学校の友だち（32.2%）、おうちの大人（28.5%）、

兄弟・姉妹（19.5%）になっています。困窮度との関連で見ると、過ごす場所では困窮度Ⅰで塾や習いごとの割合が低く、一緒に過ごすひとは困窮度Ⅱで兄弟・姉妹の割合が多くなっています。なお、8%程度の小中学生が平日の放課後を「ひとりで過ごす」と回答しており、どのように過ごしているのか気になるところです。

子どもの人間関係を見ると、いやなことや悩みを誰に相談するかの問いでは「親」（33.1%）、「学校の友だち」（26.2%）、「兄弟・姉妹」（9.2%）、「担任の先生など」（6.7%）が悩みの相談相手になっています。困窮度Ⅰ・Ⅱの場合、相談相手として学校の友だちを挙げる割合が高くなっており、親に心配させたくないとの心理が働くのではないかと考えられます。一方で、「だれにも相談できない」（1.3%）、「だれにも相談したくない」（3.1%）「わからない」（3.8%）と答えている小中学生もいます。

子どもが「失敗したときに助けてくれる」「できないことがあったとき手伝ってくれる」「頑張っているときにほめてくれる」「気持ちをわかってくれる」「自分を信じてくれる」「悩んでいるときに、どうしたらよいか教えてくれる」「良いところ、良くないところもわかってくれる」のはだれか（複数回答）の問いではすべての項目で「母親」が最も高い割合であり、母親が子どもにとって身近で頼れる存在であることがわかります。母親の次に挙げられているのは多くの場合「父親」ですが、「失敗したときに助けてくれる」「できないことがあったとき手伝ってくれる」では小中学生ともに、「気持ちをわかってくれる」「悩んでいるときに、どうしたらよいか教えてくれる」では中学生で、「友だち」の割合が父親より高くなっています。小中学生にとって友だちが身近な存在であり、とりわけ中学生にとっては気持ちがわかり相談できる存在になっています。また、どの項目においても「だれもない」の回答が見られますが、「頑張っているときにほめてくれる」「気持ちをわかってくれる」などで他の項目より割合が高くなっており、自分のことを承認してくれる存在が身近にいないと感じ、心理的に孤立している状態の子どもがいることがわかります。

自分のことを承認されるのは子どもが自己を肯定する大事な過程です。子どもにとって経済的困難への対策だけでなく、心理的な孤立への手だても求められると考えます。

・子どもの学び

子どもたちの多くは学校での勉強を「よくわかる」「だいたいわかる」と答えています。中学生になると「よくわかる」の割合が低くなり、「あまりわからない」の割合が高くなっています。そして困窮度Ⅰでは「よくわかる」の割合が低く、「あまりわからない」の割合が高くなっていることがわかります。

学習時間は小学生では「30分－1時間未満」（50.0%）、「1時間－2時間未満」（25.6%）、中学生では「1時間－2時間未満」（34.3%）、「30分－1時間未満」（26.4%）となっており、他の調査と同じように困窮度による違いは見られません。学習時間以外の要素（生活習慣、読書、体験活動、親の子どもへの期待など）が学力に影響を及ぼしていることも考えられます。家族に勉強を見てもらう頻度を見ると、小学生では「ほとんどない」（27.4%）、「ほとんど毎日」（18.4%）、中学生では「まったくない」（48.3%）、「ほとんどない」（30.9%）が多くなっています。また、読書時間は小学生では「30分未満」（47.9%）、「まったくしない」（22.6%）、「30分－1時間未満」（15.4%）、中学生では「30分未満」（33.3%）、「まったくしない」（29.9%）、「30分－1時間未満」（19.4%）の順となっていますが、困窮度Ⅰでは「まったくしない」の割合が高くなっています。

子どもの希望する学歴を見ると、小中学生とも「大学・短期大学」「高校」が多いのですが、困窮度が高いほど「中学校」「高校」が多くなっています。小学校高学年頃から将来について少しずつ考え始めるようになってきますが、「考えたことがない」が小学生で11.1%、中学生で5.0%、「わからない」が小学生で9.4%、中学生で8.0%います。

学歴形成は職業選択にも影響しますが、家庭の経済状況を考え、早い段階から進学を断念している子ども像が浮かんできます。子どもたちが家庭の経済事情から進路を閉ざすのではなく目標をもって生活し、意欲的に学びに向かうことのできる支援が望まれます。

2. 保護者の回答から

・子どもとの交流

学校が終わってから就寝までの時間で子どもと過ごす時間（複数回答）が長いのは小中学生とも「母」が最も多く、「兄・

姉」「父」の順になっています。ふたり親世帯では子どもが「父」と過ごす時間は他の家族に比べ相対的に短くなっています。

回答した保護者の94.8%は子どもを信頼（「とても信頼」+「信頼」の合計）し、94.9%が会話（「よくする」+「する」の合計）をしています。会話の内容（複数回答）は子どもが小学生か中学生かで異なり、わが子が小学生の場合は「学校のこと」（31.7%）、「友だち・恋愛のこと」（18.4%）「家族（家庭）のこと」（18.4%）の順に、中学生の場合は「学校のこと」（30.3%）、「将来のこと」（18.9%）、「友だち・恋愛のこと」（18.4%）の順になっています。学習、家事など子どもと一緒に活動する時間（平日平均）は「1-2時間未満」（全体24.9%、小学生19.7%、中学生30.8%）が最も多く、「30分-1時間未満」（全体19.1%、小学生17.2%、中学生21.4%）「2-3時間未満」（全体15.0%、小学生17.6%、中学生11.9%）と続きます。一方、「15分未満」「15-30分未満」が全体の17.6%となっており、食事を一緒に食べる時間を考慮しても平日に子どもと一緒に過ごす時間が1時間以下の世帯が見られます。

・経済的事情と子育て・健康

今回の宇佐市での調査では、ひとり親世帯が15.7%となっており、厚生労働省調査（2015）でのひとり親世帯の割合（7.6%）に比べて多くなっています。また困窮度Ⅰ-Ⅲの合計の割合は46.1%であり、経済的に困難を抱える世帯が少ない状況です。

多くの調査が明らかにしてきたように、困窮度が高いほどひとり親世帯である割合が高い傾向にあります。宇佐市でも同じ傾向が見られます。また子どものための貯蓄も困窮度が高いほど「貯蓄をしたいが、できていない」の割合が高くなっています。

子ども・子育て関係費については、児童手当は困窮度にかかわらず受けていますが、就学援助費や児童扶養手当などは困窮度が高くなるほど「受けている」「受けたことがある」の割合が高くなっています。それだけ教育・子育てには費用がかかることがわかります。

保護者の健康について見ると、健康診断（定期）は困窮度が高くなるほど未受診の割合が高くなっており、健康が案じられます。心身の健康状態を尋ねた問い（複数回答）で「疲れがとれない」「イライラする」「よく肩がこる」の順に多くなっています。困窮度が高くなると「眠れない」「不安な気持ちになる」「やる気が起きない」「イライラする」の割合が高くなっており、ネガティブな心理状態になっていることがわかります。また「不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことがあるか」の問いに対して「時々ある」（全体59.4%、小学生63.9%、中学生54.0%）、「よくある」（全体10.9%、小学生12.9%、中学生8.5%）と答えていて、保護者がその苛立ちを子どもに向けない形でうまく解消する方法を確立する必要があるようです。

調査では経済的理由によって子どもに対してできなかった経験を尋ねていますが、経済的に困窮していない世帯では72%が「無回答」で、学校行事への参加や本の購入など、子どものためにと様々なことを積極的に行っていることが推測できます。一方で、「習いごとに通わせること」「学習塾に通わせること」を含むほとんどの項目で、困窮度が高くなるほど「できなかった」と回答する割合が高くなっています。

子どもの将来に関する希望についての問いでは90%を超える保護者が高校以上の学校への進学を希望しています。しかしながら、困窮度が高いほど「大学・短期大学」への進学希望の割合は低くなっています。希望通りになると思うかの問いに対し「思わない」と答えた保護者にその理由を尋ねています。困窮度を問わず「経済的余裕がないから」を選んでいて、子どもを大学まで進学させることは保護者にとって家計を圧迫する経費だと捉えられています。そして困窮度が高いほどその割合は高くなっていることがわかります。

また、子どもと保護者の希望する学歴の割合を比べると、子どもは「大学・短期大学」（37.5%）、「高校」（19.8%）、「専門学校」（14.3%）、保護者は「大学・短期大学」（49.3%）、「高校」（22.6%）「専門学校」（16.7%）の順で、とくに「大学・短期大学」の割合に差が見られます。子どもの回答に「考えたことがない」（8.3%）、「わからない」（8.7%）の答えも一定の割合見られ、進路の具体的なイメージがまだない子どもがいることから違いが生じていることが考えられます。また希望通りの学校に進学できるかの問いに保護者は「そう思う」（47.8%）、「思わない」（4.8%）、「わからない」（46.7%）と回答しており、期待と不安が半々の心理状況であることがうかがえます。一方、希望通りいくと「思わない」理由は「子どもの学力」「経済的な余裕がない」「子どもの希望との違い」の回答が見られますが、困窮度Ⅰ及びひとり親世帯

では「経済的な余裕がない」の割合が高くなっています。

・保護者の社会関係と子育てに関するニーズ

保護者の人間関係を見ると、「悩みを親身になって聞いてくれる」（85.3%）「子どもの体調が悪いとき医療機関に連れて行ってくれる」（79.5%）「子どもとの関わりに適切な助言をくれる」（79.3%）「気持ちを察して思いやってくれる」（77.9%）「趣味など一緒に話し、気分転換させてくれる」（77.7%）「留守を頼める」（76.6%）「子どもの学びなど情報を教えてくれる」（69.9%）の順に「いる」の回答が多くなっています。

悩みなどの相談相手は「配偶者・パートナー」「自分の親」「兄弟・姉妹など」の順になっており、配偶者を中心とする親族ネットワークが相談先として位置づいています。しかしながら、困窮度Ⅰの場合、「配偶者・パートナー」「配偶者・パートナーの親」の割合は低く、これはひとり親世帯が多いことと関連しています。

「子ども食堂」などの子どもの居場所の利用に関しては、「利用するつもりはない」が 56.1%、「あれば利用したい」が 42.3%との回答結果になっていますが、安価で栄養バランスのとれた夕食提供の場を利用させたいかの問いでは「はい」（全体 45.3%、小学生 47.0%、中学生 43.3%）と「いいえ」（全体 45.5%、小学生 43.2%、中学生 48.3%）の意見が拮抗しています。無料の学習の機会や体験活動の機会の利用に関しては「学習の機会」（86.0%）、「体験活動の機会」（84.6%）を「利用したい」と回答しており、「無料」ということがその割合を高くしていると考えられます。

3. まとめにかえて：子ども孤立させず、未来に希望が持てる取り組みを

宇佐市の小中学生の多くは健やかに育っていますが、困難を抱える子ども達もいます。今回の調査結果を受け、特に困難を抱える子ども達に関して以下の点についてコメントしたいと思います。

宇佐市の子ども達の中には、我が家の家計や保護者の苦勞を考慮して、早い段階から進学を断念している子ども達もいます。家庭の経済事情から進路を閉ざすのではなく、目標をもって意欲的に学びに向かうことができるような支援が望まれます。また、自分を認めてくれる身近な存在がおらず心理的に孤立した子どももいます。身近な他者からの承認は子どもにとって、自己を肯定する大事な要件の1つです。子どもにとって経済的困難への対策だけでなく、何か困ったことが起きた時に相談できるルートを築くなど、心理的な孤立への手だてが求められています。子ども達を独りにさせず、子ども一人ひとりが未来に希望をもって学び育つことを可能にするための環境づくりを進めていくことが必要ではないでしょうか。